

長崎だより

長崎の情報を
お届けします

FFG調査月報の姉妹誌「ながさき経済」を発刊している、ふくおかフィナンシャルグループの長崎経済研究所。長崎の旬な情報を提供するコーナー「長崎だより」の今月号は、こながい町おこし隊 発起人、Yutaka Design 代表 西崎 豊様より『過疎がなんだ。過疎地域を夢の国に。』と題し寄稿していただきました。

長崎経済研究所による「ながさき経済web」随時更新中!



当研究所が発信する最新の情報をメールでお届けします。

メールマガジンの登録はこちら▶



お問い合わせ

株式会社長崎経済研究所

長崎市銅座町1番11号
十八親和銀行本店内
TEL095-828-8859



長崎経済研究所とは

長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活のお役に立つ情報をご提供するとともに、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しております。





過疎がなんだ。過疎地域を夢の国に。

こながい町おこし隊 発起人 Yutaka Design 代表 西崎 豊

はじめに

唐突ですが、『小長井町』をご存知でしょうか？

長崎県のほぼ真ん中に位置し、諫早湾、大村湾、橘湾の3つの海に囲まれた諫早市の東のすみっこ。佐賀との県境に位置する過疎の町。様々なバックグラウンドを持ちながらも、生まれ育った町のために何かしたいという『郷土愛』の下に集まった、大人の大人の物語をお話させていただきます。

こながい町おこし隊

生まれて此の方、小長井在住の漁師と、高校卒業後、20年間日本各地、海外を巡ってきた西崎。この幼なじみ2人が、「自分たちの住む町を自分たちで面白い町に」という思いで、2022年5月にこながい町おこし隊を発足させました。年代、職業、経歴の異なる、ユニークな10名の小長井町在住者、出身者から成る

Profile



こながい町おこし隊 発起人
ユタカ デザイン
Yutaka Design 代表 にし ぎき ゆたか
西崎 豊

1982年長崎県諫早市生まれ。諫早農業高等学校卒業後、九州農政局(農林水産省)に入局するも、2年で脱公務員、音楽の道へ。2012年通販会社にて新規事業立上げ時にうつ病を発症。休職中の東日本大震災の被災地訪問が大きな岐路となり、30歳、英語力ゼロで海外渡航。ニュージーランド、オーストラリア、フィリピンを経て、南太平洋の島国バヌアツ共和国の現地ツアー会社へ。東京五輪を目前に控えた2019年に帰国、インバウンド向けホテルの立上げに従事するもコロナに見舞われる。カスタマーサポート、アプリの品質管理業務のかたわら3つのスクールでWEBデザイン、プログラミングを学び、副業を開始。38歳で起業、地元小長井町に戻り、漁師の幼なじみと町おこし団体を発足。小長井町ポータルサイトの自主制作をはじめ、スキルと経験とご縁を活かした町おこしWEBデザイナーとして活動。2024年に町おこしをテーマとしたクラウドファンディング、自身の半生を綴った電子書籍を出版予定。



Instagram



LINEスタンプ



こなガイド

有志団体です。

それぞれに理想や町おこしを通して成し遂げたいことは違うけれど、根本にある「郷土愛」「継承」「変化」をテーマに、「郷土愛と故郷の景観を未来へつなぐ」ため、個々人、個々事業でなく、小長井町としての一体化、活性化、ブランディングを目的として、慣例や常識に縛られないアイデアと行動力、そして溢れんばかりの『小長井愛』をエネルギーに、様々な企画、PR活動を行っています。



町おこし隊の有志とともに(左から2番目が筆者)



「出過ぎた杭になる」

変化に対する抵抗は地方に限ったことではなく、日本人の特徴でもあり、「右向け右」の精神で、いかに周囲と同じであるか、目立たないかがある種の美德のような感覚があるように思います。『目立たないこと』は持てる才能や可能性を埋もれさせ、無駄にしてしまう、まさに『宝の持ち腐れ』です。

人に限ったことではなく、モノや場所にも言えることで、時代が変化する中、小長井の景観、人の温かき、郷土愛を継承していくためには、望むか望まないかに関わらず、まだ十二分に生かし切れていない、眠っている魅力や可能性を見つけ出し、これまで以上に積極的に活用、発信していく必要があります。過去の繰り返しでは未来は変わりません。それはまさしく変化を創ること

いては何もできません。厳しい現状を完全に变えることは難しくとも、今の子どもたちにとって少しでも住み良い町にするためには、今の私たち大人世代が描く未来に向かって種を蒔き、育てていくことが大切だと思います。

小長井の持つ宝と、今を生きる私たちのチカラ、可能性を最大限に発揮して、「失敗上等」「行動最強」「成長最幸」の精神で、打ちたくても打てない『出過ぎた杭』になる。合言葉は「やるか、もつとやるか」。

小長井町とは

佐賀県との県境に位置する、有明海側の長崎県の玄関口。多良連山を背に南の有明海へ扇状に広がる丘陵地帯で、豊かな自然環境に恵まれた地域です。

かつては森山町、飯盛町、高来町、小長井町の4つの町からなる北高地区として存在していましたが、2005年3月1日に諫早市、多



小長井位置図

良見町(旧西彼杵郡)と合併し、新生『諫早市』の一部となりました。最盛期は7千人以上あった人口も、少子高齢化、人口流出の一途を辿り続け、2021年に過疎地域指定を受けました。現在は4千人まで減少し、小中学校の生徒数も私たちが子どもの頃と比較すると1/3程度にまで激減。学年によっては10人を切るころまで来ており、町内に3校ある内の2つの小学校では複式学級となっています。

「過疎を機会に」

そんな中、1997年の『長崎旅博覧会』に合わせて建設された『フルーツバス停』が、CMや写真集のロ

ケ地に採用され、SNSの普及とともに認知が高まり、今や諫早、長崎の観光スポットとして、国内外から一年を通して観光客が訪れる人気スポットとなっています。

また、日本一に輝いた有明海小長井産の牡蠣を求めて、県外からも多くの人々が足を運んでくれますし、西九州新幹線かもめと共に産声をあげた、JR小長井駅にも停車する観光列車『ふたつ星 4047』や、『ふるさとの新たな魅力を創出するキャリア教育実践事業』を通じた小長井中学校の生徒たちによる地域活性化への取組み、地域おこし協力隊2名の着任など、窮地にありながらもこれまでにないビッグチャンスが訪れていると感じます。

そのチャンスに気づくのも生かすのも自分たち次第。

「あの時もっと行動していれば・・・」と後悔することがないよう、今ある機会を最大限に生かしていけさえすれば、過疎をもチャンスに変えられるはず。



フルーツバス停

これまでの活動・軌跡

「住む人も来る人も楽しい町へ」

町おこし隊としての最初の対外的な活動は、2022年9月。コロナ急拡大により地元の夏祭りが直前に中止となったことを受け、「子どもたちに楽しい夏の思い出をつくってほしい」との想いで自主開催した『ほんなこくてよかもん祭り〜ふたつ星だヨ！全員集合』。

子どもたちが無料で楽しめるウォーターサバゲー（水鉄砲ゲーム）をメインに、駄菓子屋出店、農産物の軽トラ市や、小長井中学校生徒によるオリジナルグッズ販売、LINEスタンプキャラクターデザイン町の民投票、夏祭りポスター展などを行いました。

それから、県内各地イベントでの小長井特産品のPR出店、小長井町の魅力や観光スポットをはじめ、歴史や文化、方言など、様々な情報を詰め込んだポータルサイト『こなガイド』制作、フルーツバス停



ウォーターサバゲー

LINEスタンプや缶バッジ、クリアファイル、フルーツバス停ヘルメット等の町おこしグッズ開発、小長井駅弁企画、JR観光列車ふたつ星4047おもてなしなど、自分たちができること、小長井ならではの取り組みを模索し、挑戦してきました。

「子どもたちと町おこし」

町おこし隊が掲げている活動テー



こながいブランド缶バッジ



出前授業@小長井小学校



花壇アート@JR 小長井駅



ふたつ星 4047 メッセージカード



ふたつ星 4047 おもてなし

マの1つが『子どもたちと一緒に町おこし』。30、40代で構成されるこながい町おこし隊の活動は、同世代や私たちの親世代にすんなり受け入れられたかと言うと、決してそうではありませんでした。それが今までにない取組みや、変化を生むアイデアであれば尚更。自分たちだけでできることには限界があり、町おこし隊単独での発信や活動のみでは、大きな変化や広がりには期待できないことは当初から認識していました。

そんな厚い壁を突破する糸口となったのが、町内の小中学校で行われていた『ふるさとの新たな魅力を創出するキャリア教育実践事業』でした。郷土愛をはじめ、自ら想像する力やチャレンジ精神、コミュニケーションや実行力など、ふるさとを担う実践力を育むことを目的とした特別科目で、町おこし隊に出前授業の機会を頂いたことをキッカケに、様々なコラボレーション企画が生まれました。

- こながいブランドマークデザイン
- フルーツバス停&小長井方言LINEスタンプキャラクターデザイン
- JR 小長井駅への花壇アート設置
- ふたつ星 4047 乗客に向けた小長井の魅力を伝えるおもてなしメッセージカード作成・配布
- 地域特産品を販売する物産展『ときめきこながい市』コラボ出店



自分が暮らす町のことを考え、自分たちのアイデアがカタチになり、町

のみんなに知ってもらおうという体験は、「表現することの自由」と「行動することの大切さ」に気づかせることになり、将来的に彼らの人生にとって大きな財産になるに違いありません。

子どもたちのやることなら親世代、祖父母世代は興味を持ちます。それが子どもたちの成長や小長井の活性化に繋がることなら尚のこと。そんな機会が増えることで町おこしの取組みや機運が自然な形で広がり、地元の魅力の再発見や郷土愛の醸成にも繋がり、年代を超えて町民一人一人が誇りと愛着を持てることで、少しずつでも着実に、町全体が活気と愛に満ち溢れる場所になっていけると信じています。そのためにも、まずは私たち大人が率先して夢を語り、楽しみながら全力で行動してカタチにする姿を見せることが大事なのです。

「楽しくないと続かない」

先述の通り、こながい町おこし隊はあくまで有志団体で、全員が本業のかたわら、仕事の合間や休日を使ってボランティアで活動しており、それぞれ家庭や置かれた環境がある中、割ける時間やペースも様々。そんな状況下では、愛する地元のためとは言え、「やらなければいけない」「犠牲にしないといけない」といった義務感が大きくなってしまつと、気持ちも乗らない上に、活動するほど辛さが増して、「一番大切な「続けること」が難しくなってしまう。

やりたいことも想いも山のようにありますが、何をやるかを決定する時に大事にしている基準があります。それは「自分たち自身がワクワクするか」、「関わる人を笑顔にできるか」。自分たちのやりたいこと、ワクワクすることで他の誰かを笑顔にできるなら、アイデアやエネルギーは無限に湧いてくる。そこにやらない理由や言い訳が入る余地もなく、たとえ

困難でも、自然と「どうやってたらできるか」に思考と時間が集約されていきます。

その実例が、昨年10月21日、山茶花高原ピクニックパークにて記念すべき初開催を迎えた第1回小長井フェスティバル『こなフェス 2023』フェスよ、来い！』。

山茶花高原は、1988年の開園後、8年あまりで200万人が来園する県内屈指のレジャースポットでしたが、他観光スポットの台頭、時代の変化や施設の老朽化も相まって、年々客足が減少し、私たちが子どもの頃に見た賑わいは失われていました。風車の下の広大な芝生広場に、高台から見下ろす有明海と雲仙普賢岳の眺望という、ポテンシャル溢れる箱にも関わらず、その魅力を眠らせたまま、ただ廃れていくだけ。地元に住みながら、また『こながい町おこし隊』という名がありながら、その現状に対して何もせずにはいられない。もう一度あの頃の賑わいを取り戻し、地元子どもたちをはじめ

め、多くの人に山茶花高原、そして小長井町の魅力を知ってほしい。

小長井色を盛り込みながらも、町外、県外の方が子どもから大人まで一日中楽しめるよう、それぞれの「やってみたい！」「あったらいいな！」を詰め込んだ『みんなの遊び場』を自分たちの手で創ろう。そんな想いで、文字通り命がけて創りあげた夢の舞台、それが『こなフェス』です。

短い準備期間かつ隊の全員が未経験という中、多くの方々の応援やサポートを賜り、なんとか開催にこぎつけ、イベント当日は天候にも恵まれたこともあり、お世辞にもアクセスが良いとは言えない山奥のロケーションで、初開催、高校生以上は有料入場にも関わらず、県内外から2,700人ももの来場があり、怪我人や大きなトラブルもなく、無事フェスを終えることができたのは、私たちこながい町おこし隊だけでなく、会場の山茶花高原、そして今後の小長井町にとって大きな財産になったと思います。



こなフェス 2023



これからの取り組み・展望

「複利のチカラで町おこし」

『ローマは一日にしてならず』。町おこしも一朝一夕ですぐに何かが変わるようなものではありません。人も同じです。

単発的、断続的な行動では変化は生まれにくく、続けることで習慣化し、習慣化する過程で成長でき、当たり前の基準が上がりが続けることで、結果的に出来るが増え、幅が広がり、大きな変化が生まれていく。コツコツでも時間をかけて積み重ねることで、それ以上のリターンが得られる、まさしく投資における複利と同じことが町おこしにも当てはまります。

新しいことを生み出すことも大切ですが、ふたつ星 4047 おもてなしや、ポータルサイト、SNSでの情報発信、各地イベントでの特産品PR、子どもたち向けのイベント開催やコラボ企画など、今後もこれまでの取組みを継続して未来への種ま

きを行いつつ、3小学校統合前、最後の年となる2024年度は、新たな形での伝統復活・継承と、子ども達の未来へ繋げる小学校合同&町民共同の「Unitéプロジェクト」『こながい盆踊りナイト』『こなとも』の旗揚げ、そして『こなフェス』の継続開催に向け、愚直に日々積み重ねを続けるのみ。

「頼まれごとは試されごと」

自分たちのやりたいことだけやって、それが町おこしに繋がればそれほど幸せなことはありませんが、有名人や資本家でもない限り、なかなかそうもいきません。また、やりたいことだけやっていても、自分たちの枠の中から飛び出せず、本当の意味での町おこしは実現できないと思います。

隊が発足してまだ2年余りですが、活動を通して多くのご縁に恵まれ、そこから色々なイベントや企画、活動にお声がけいただき、想像だになかったスピードで物事が進み、活動の場の広がりとステージの変化



に繋がっていったのは「断らなかった」からです。

実績も知名度も無い自分たちには、できることも活動の場も限られている。ならばまずは求められる場所や求められることに全力を尽くす。そうすることでまた新たな出逢いが生まれ、トライ&エラーの中で経験を積み、成功体験を重ねることで少しずつ自信にもなり、隊としてのレベルアップに繋がる。レベルが上がれば出来るが増え、より高い目標に挑戦できるようになり、冒険の途中で仲間が増え、自ら機会を創り出せるようになっていく。そうしてカタチにできたのが『こなフェス2023』であり、こなフェス開催という1つの冒険を通して、かけがえない経験を積み、より多くの方と繋がることができました。

「真の町おこし隊へ」

こなフェス2023開催後、これまで以上にお声がけいただく機会が増えたとともに、隊への期待や求め

られることもより上のステージに上がってきていることを実感しています。不安がないと言えば真つ赤な嘘になります。声をかけていただけるとは期待や可能性を感じてくれているから。その気持ちと機会を有り難く受け取って、今後は周囲の期待と自分たちの夢ややりたいことを掛け合わせ、地域にとっても個人にとっても実になる活動を行っていきます。社団法人化はその受け皿とするための年内の1つの達成目標。少し背伸びして、少しずつ大きな自分になって、その積み重ねで名実ともに真の『こながい町おこし隊』へ。私たちの挑戦は終わりません。

ゆらいひ

「過疎地域を夢の国に」

上を見ても下を見てもキリがありません。小長井より状況の酷いところはいくらでもあります。無いものに目を向けて、ただ嘆いて何もしないことを選ぶより、今あるものや

可能性に目を向けて、想像、行動し、変化、創造していく。

過疎地域だからできること、小長井だからできることはまだまだ沢山あります。

変化や機会を待つのではなく、自らが変化となり、機会を創り出していく。

小長井町も私たち町おこし隊もまだまだ夢の途中です。今はまだ名前負けしていますが、いつの日か胸を張って『こながい町おこし隊』を名乗れるよう、そしていつの日か『町おこし隊』という存在が不要になるくらい、町民一人ひとりがアイデアを出し合い、カタチにできる町を目指して。そんな町って、『夢の国』のようだと思いますか？

私たちはこの小長井町を、子どもたちだけでなく、大人も夢を叶えられる場所にしたい。大の大人が楽しそうに様々なことに挑戦していく。その姿は、未来への種まきや水やりのような、一番の生きた継承の形。子どもたちが、「大人って楽しそう

だなあ」「町の未来を想像してアイデアを考えるってワクワクするなあ」と感じ、あとに続いてくれたらこれほど嬉しいことはありませんし、「こんな大人に早くになりたい！」と心から思ってもらえるよう、『出過ぎた杭』を目指し、ハートフルに、楽しみながらこながい町おこし隊は挑戦し続けていきます！

こながい町おこし隊全員集合写真

